

これからの寺院の可能性 : 人をつなぐ根室のプロ ジェクト

著者	速水 馨
雑誌名	真実心
号	40
ページ	143-172
発行年	2019-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000905/

これからの寺院の可能性

——人をつなぐ根室のプロジェクト——

速水 馨

人をつなぐデザイン

みなさん、こんにちは。東本願寺（真宗大谷派）の速水馨と申します。『これからの寺院の可能性』ということをお話します。

みなさんにとって、お寺は日常的な存在でしょうか。残念ながらそのような場となっていないというのが多くの現実であると思います。このような中、寺院が地域になくてもならない存在となるためには、「人をつなぐデザイン」が必要であると考えています。人をつなぐ具体的な場になることによって、寺院の可能性は未来へ大きく開かれてきます。実は、この取り組みが北海道の根室というまちにおいて現在進行形で行われています。今

回はこの試みをお話させていただきます。

コミュニティデザインによる仕事

みなさんは、山崎亮という人をご存知でしょうか。コミュニティデザイナーという少し聞き慣れない肩書を名乗っておられます。studio-I という事務所を立ち上げて、コミュニティの再生や創出、あるいは人のつながりをデザインすることを仕事としている方です。根室の取り組みは、山崎亮さんをはじめとする studio-I の方々が行ったプロジェクトです。根室の話に入る前に、彼がこれまで手がけた仕事を三つだけ紹介します。

「海士町」というまちの名を聞いたことがありますか。島根県の沖合、隠岐諸島の島前にあたる島で、「奇跡の島」と言われています。安倍総理が二〇一四年国会の所信表明で「地域創成」の事例として取り上げたまちでもあります。フェリーで行けば四時間はかかるとはありますが、この島に新たに移り住むイターン、あるいは元々住んでいた人がまた戻ってくるイターン、そういう人がひっきりなしに増えています。その大きな契機を開いたのが十年に一回、自治体が作成する「総合振興計画」でした。多くの自治体は業者に委託し

て、提案を受けることがほとんどのようですが、海士町は山崎さんに振興計画を託しました。人口二五〇〇人の中で公募に応じた六〇人がワークショップを重ね、地域の資源も活用しながら、『島の幸福論』と題した振興計画が作られました。「一人でできること、二人でできること、五人ならできること、一〇〇人ならできること、一〇〇〇人でできること」として具体的な提案がまとめられたものです。自分たちの幸せは誰かに設定してもらうものではない。自分たちが本当にやりたいこと、本当に求められていること、これを見んなの話し合いの中で作って、実際に行動して、そしてまちが活性化しました。

それから、「泉佐野丘陵緑地パークマネージメント支援」です。泉佐野丘陵緑地は閑空のすぐ近くにある山の手の地域です。大阪府の事業として、ここに公園を造る計画がありました。一般的には公園は業者の人たちが、どうすれば子どもや家族が喜ぶかということを考えて造ります。でも、そんなふうに至れり尽くせりの空間を作ってしまうえば、ここに来る人たちは単なるお客さんになってしまう。この公園はそうじゃないんですよ。地域の人たちが集まって、自分たちが本当に求める公園を自分たちで創っていくのです。この公園づくりを担ったのは、定年退職をした年配の男性たちです。時間が空いている人はどんな人かと考えたなら、会社を辞めて自由な時間を持っている人たちだろうということ、

その年代をターゲットにした新聞広告などを出して公募が行われました。そうしたら、参加にあたってのレポートまで書いた六十代後半の人たちが二十人ぐらい集まったのです。ところが、集まった人たちはみんな不機嫌な顔をしている。なぜそんなに不機嫌なのかと言うと、レポートを書いて申し込んだのは、お連れ合いだったのですね。つまり、会社を辞めてずっと家にいてもらっちゃ困るといふか、面倒だと（笑）。それだったら、「身体を動かして公園づくり、いいじゃない」と、黙って申し込まれたのです。でも、実際にやりましたら、みんなどんどんハマっていった。この男性たちを「パークレンジャー」と呼んでいます。業者が造った公園に「はい、どうぞ」とお迎えされるのではなくて、新しく自分たちが創った公園にお迎えする。この公園に対する思い入れは比べようもないほど深い。誰かに頼まれたわけでもないのに、この公園のために自分たちは何ができるのかと考えるようになっていきます。このプロジェクトは新たに人を巻き込んで、今も創り続けられている公園です。

最後に、「いえしま特産品開発」のプロジェクトをお話します。瀬戸内海に家島があります。ここは採石と海運業で成り立っている島でしたが、事業の低迷で地域経済に深いダメージを与えていました。その中に *T-olpms* が入って、まずインタビュー形式で島の方

にヒアリングが行われたのですね、「この島の魅力って何だと思えますか」「これからどういうことをやりたいですか」と。しかし、誰も何も言わない。みんな口々に「魅力なんてあるわけないだろう」と。このような状況の中、studio-Lは島に住んでいない大学生を連れてこの島にやってきたのですね。学生たちには「この島のいいなと思う部分をいっぱい写真に撮ってください」と伝えていきます。学生たちは住民と接しながら、いろいろ写真を撮っていきました。そうすると、「こんなところに魅力を感じるのか」と島の人が逆に驚いたのです。そして、島の魅力を活かした行動を起こしていこうとなった時、中心になって動いたのは元気澁刺な三人の主婦たちでした。島の水産業と連携した特産品開発に取り組み、数々の大ヒットを生み出しました。そして、この女性たちが「NPOを作りたいんや」と言い出したのです。山崎さんが「NPOって何かわかってますか」と聞いたたら、「いや、何か知らんけど、NPOがやりたいんや」と。そして法人を立ち上げて、郷土料理の先生やマーケティングの専門家を招いて勉強会を重ね、「ごはん泥棒シリーズ」「手間いらず、嫁いらずシリーズ」といった特産品を開発。購入者を家島に招いて生産地見学ツアーを開催するなど、島の水産業を盛り上げるとともに特産品を通じた島のPRにも一役買っています。今まで自分の住んでいる島に何の自信もない、何の魅力もないと思ってい

た人たちに、「この島のために何かをやっつけていこう」という気持ちが生み出されていったのです。これまでバラバラで、あきらめて待つだけだった住民たちを活気づけたのは、地域の課題を地域の人たちが解決することを支えるコミュニティデザインという手法なのです。

山崎さんがなぜこのようなことに携わろうとしたのか。最初のきっかけは阪神淡路大震災であったと語られています。この時、山崎さんは設計事務所で建物やランドスケープをデザインする仕事をされていました。ところが、地震が発生し、家が崩れ、ビルが倒れて、倒れた建物が人を殺していくという状況に出会った。その時に、「絶対に倒れない建築をつくるのか、それとも倒れた時に助け合えるまちをつくるのか」、後者だろうと。絶対に倒れない建物をつくるのではなくて、倒れた時に助け合えるようなまちづくりをしないといけないんじゃないか。そこから「コミュニティをデザインする」、あるいは「つくらないデザイナー」として動き出していった、これが山崎亮という人でした。

寺の外に出て、まちの中へ

そこで私はもし山崎さんがコミュニティデザインという観点からお寺を捉えた時、どうなるのか、可能性はどういうものがあるのか尋ねてみたいと思うようになりました。そして、二〇一四年、中央同朋会議を行いました。この会議は真宗大谷派各組織の役職者、学者の人たちが、これからの浄土真宗をどう考えていけばいいのか、学術的にどうおさえていけばいいのかを考えていく場なのですが、これまで行われてきた議論を続けても新たな展開を生み出すのは難しいのではないかと思っていたので、思い切って山崎亮さんにお越しいただきました。会場も東本願寺内の施設やホテルで行うのをやめまして、大谷大学の講堂を会場にして一般公開で行いました。その時の講題が今日の『これからの寺院の可能性』です。基調講演のなかで印象に残ったのは、「これからは、お寺を開いていかなければならない」ということをよく聞くけれども、もう開くというだけでは手遅れではないかと思う地域がかなりある。「お寺を開くというよりもお寺から出て行って、まちの中に入っていくか」と、お寺を開いて待たせていても誰も来ないという状態になるでしょう」と

という言葉でした。お寺の外に出て、まちの中へ。地域に暮らす人たちがどんな苦勞をしているのか、どんなことを改善して欲しいと思っているのか、あるいはやりたいと思っ
ていることはどんなことなのか。それを聞いて「おもしろいじゃないですか、一緒にやっ
て行きましょう」と。お寺からまちへ。そこからしか始まらないんだということです。一つの
場所に留まって至れり尽くせりをやっても誰も来ない。本当にみんながやりたい、これが
欲しいと思うことを、まちの中に、人の中に入れていって、一緒に形にしていく。そうい
う動きが必要だということを中心同朋会議の場で提起していただきました。

根室ジーンプロジェクト

そして、このことを受けてやってみようと動き出す人たちが出てきました。それが北海
道の根室にある根室別院というお寺です。このプロジェクトは『根室ジーンプロジエ
クト』と命名されました。この名には、「寺院（じいん）」という響き、心を打たれて「じい
ん」と感動するということ、GENE（遺伝子）という意味が込められていて、根室に
息づいている遺伝子をもう一度表現し直そうという意図があります。

根室に行ったことある方いらっしゃいますか。北海道の最東端、目の前に北方四島が大きく見えるまちです。基幹産業は漁業です。人口は二七、六二九人。戦後間もない最盛期は五万人を超えていました。ところが今、半分になって、そう遠くない未来に一万七千人になっていくだろうと推定されています。高齢化率は三一・四％です。日本全体の平均より少し高いくらいです。まちの様子を見ますと、ずいぶん整備されています。商店街が並んでいるのですが、あまり人通りが見られません。道幅はかなり広いです。サンマが多く獲れますので、大型のトラックが出入りしやすいように整備されています。また、ロシアと接する場所でもあることから、道路の標識にもロシア語が併記されています。ロシアの人もたくさん来ておられます。また、手つかずの大自然がずっと広がっています。北方四島を除けば最東端になるので、日本で最も日の出が早いまちでもあります。朝の四時前になるともう明るくなってきました。それぐらい日の出が早いまちです。逆に言えば日が沈むのも早い。午後四時には暗くなって、五時には真っ暗になります。根室地方独自に獲れる花咲ガニやウニも獲れます。豊富な海産物に恵まれているまちでもあります。

手を挙げてくれたお寺は根室別院です。一番責任を持っているのが輪番(りんばん)という役職者で、列座(れつざ)という二十代〜三十代を中心とする若手僧侶が六人いま

す。そして、根室別院に所属している門徒（もんと）によって構成されています。実際にお話を伺うと、少子高齢化で門徒さんが減少すると共に、若い世代がお寺に来ないということが顕著で、このままでは未来がないんじゃないかという課題を抱えていらっしゃる。実際に、お寺に来られる男女の比率は七〇%以上が女性です。年代で見ますと、六十代から八十代で九二%。ほぼ六十代以上の方しか来ないと言っていると思います。その中でも七十代以上がほぼ六割を占めている状態です。

少子高齢化による門徒減少、若い世代が来ないという課題の解決方法は、中央同朋会議で話されたように「寺からまちへ」に定まりました。待ちの姿勢ではなく外に出ていく。必要とされていることは何なのか、もう一度聞き直すというところから始めました。テーマは「人生九〇年時代の生き方を実現するコミュニティ」です。今は人生一〇〇年時代と言われますが、当時は人生九〇年時代と言っていました。この取り組みの中で、人生九〇年時代の生き方を考える「みんなの生き方ラボ」という場を開きました。具体的には根室別院に所属されている門徒さん、地域住民を対象とした全六回のワークショップを行って、お寺で活動できる具体的な実践を話し合うというものです。そして、最終的に「寺カフェ」を作っていくということになりました。

ただ、ワークシヨップと言われても、お寺に来る人は七十代以上の方が六割を占めて
ます。そんな中でカタカナを使った場に人が集まるのかというのが大きな不安でした。そ
こで考えられたのが呼びかけるチラシの工夫です。花の形にしてですね、「若いイケメン
(列座) によるお誘い」ということなのですが、門徒さんに花を手渡すように、一人ひと
りに呼びかけました。来てくれるのかなという心配はありましたが、ワークシヨップには
六十人以上の人が来てくださり、会場となる大広間がいっぱいになりました。

見えてきた地域の願い

まず第一回の生き方ラボですが、ワークを行うべく小さなグループを作ります。こんな
時に最初に行うのは自己紹介だと思えますが、ここではしませんでした。なぜかと言え
ば、「私の名前は〇〇です。今日はよろしくお願いします」と簡単に終わってしまうか、
周りの空気も読まずに話し出したら止まらない人もいます。ここで行ったのは「他己紹
介」というものです。A4の紙に十字の線を引いて、四つの項目を書いたものをみなさん
に渡しました。名前、呼ばれたい愛称、参加の動機、意外な一面。これを「隣りに座って

いる人にインタビュールしてください。時間は三分です」と。まず隣の人に名前を聞いて、それを書き留める。そして、このワークシヨップの中で呼んでほしい愛称を聞きます。そして、参加の動機は何ですかと。もう一つポイントだったのは、意外な一面を聞いたということ。聞くのはこの四つだけ。これをグループの中で、「いまインタビュールした人を、グループで紹介してください」と言つて四つの項目を紹介してもらいました。自己紹介をしても、なかなか雰囲気盛り上がることはありませんけれども、これで一気に場がなごみました。特に「意外な一面」で、クスツと笑えるようなことを話してくれたのが大きかったと思います。初対面の人たちが集まって何かをやつていこうとする時、人と人の間の溝を埋めていく時に大変有効な手段だと思っています。

次に行ったのは個人ワークです。「ライフチャート」と言われるワークで、「ロスライン」とも言われています。言つてみれば、生まれた時から現在に至るまでの幸福度をグラフの線で表してもらおうというものです。そして、これから先の将来展望も表してもらいました。書き出しは、生まれてから小学校に至るまで、その時の自分の幸福度はどうであったか。高くて一〇〇%、いろんなことがあつて辛かったら低い。これを線で書き込んでいただくのです。このチャートはアメリカ型、日本型というものがあつると言われています。

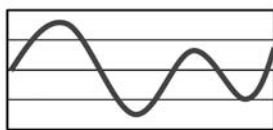
す。加齢とともに幸福度が下がっていくのが日本人の特徴なのだそうです。特に男性。幼い頃は別にして、今まで外で働きに行つて、それなりのやりがい、満足度を持っていた。ところが、定年退職した途端に幸福度がぐっと下がります。今までは年賀状が毎年五百通届いていたのに、退職した途端ほとんど来なくなる。人も尋ねて来ない。誰からも頼られることがない。これに対してアメリカ型はU型と言われます。幼い頃は高い。でも学生時代は課題がたくさんあつて大変、仕事に行つても成果を残さないといけないので大変、その中で、頑張つて、頑張つて退職を迎える。退職したら、今まで自分が本当にやりたかつたことをやるというライフスタイルがあるそうです。なので、晩年になればなるほど幸福度が上がっていく。もしみなさんがライフチャートを描かれるとしたら、どのようなラインになるでしょうか。

根室でこれを行った時、同じ形は一つもないということが大前提ですが、大きく四つ形が見えてきました。山あり谷あり型、幸福上昇型、いろいろあるけど幸せ型、平常心型。根室ではどの形が一番多かったと思いますか。人口がどんどん減少していつているまちです。自分たちの子どもも高校までは地元にいるけれども、その後は就職や大学で地元にはほとんど残りません。家に住んでいるのは自分だけという方もおられます。地域産業もな

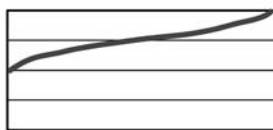
なかなか上手くないかない状況が続いています。しかし、根室で一番多かったのは幸福度上昇型だったのです。振り返ってみると、不幸だと感じたことが一度もない。ずっと上昇し続けて、最後までグッと上がっています。年配の女性がたくさん来てくれたのですが、その人たちが描いたのがこの形でした。ここから何が読み取れるかというと、このまちが好きなんだと、このまちで最後の最後まで幸せに暮らしていきたい、このような思いがあるということでした。

この後、八つのチームを作って、自分たちで「やってみたいこと」を考えてみようということで、いわゆるブレスト（ブレインストリーミング）のワークショップを行いました。

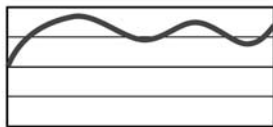
人生90年の幸福度



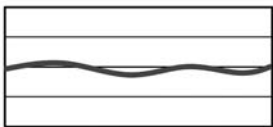
①人生山あり谷あり型



②幸福度上昇型

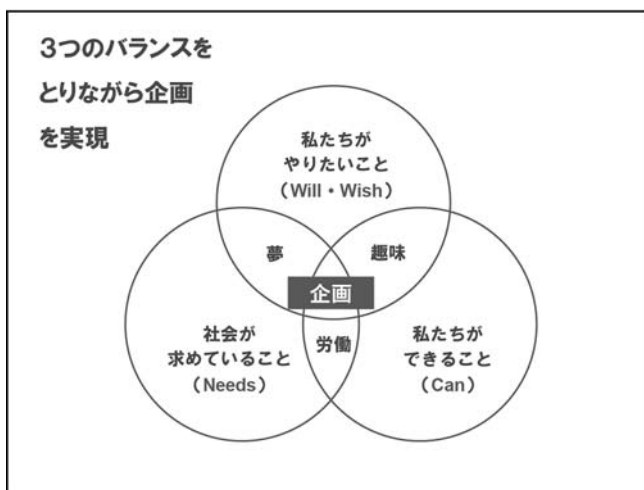


③色々あるけど幸せ型



④平常心型

付箋に自分のやってみたいことを書き込んで、模造紙に貼って類型化していくというワークです。ただ、これをどう集約していくのか、どこにポイントをしぼっていくのかという時に、3つのバランスを取ることを重要視しました。それは、「私たちがやりたいことなのか」、「社会が求めていることなのか」、「私たちができることなのか」ということです。例えば、私たちがやりたいことでも社会が全く求めていないことならば、それは単なる趣味であり、夢で終わってしまう。社会が求めていることは確かにはつきりある、でも、それをやるだけならば単なる労働になってしまう。私たちができることだけならば、それは単なる趣味で終わってしまう。この三



つがきっちり重なり合わなければ企画にはならないということです。そのことを十分留意しながら、最終的に付箋を集約していくというワークをやりました。そして、どんなことをやってみたいのかをグループ毎に絞り込み、企画に仕立て上げていきました。これを受けて、一日限定で、社会実験という名のカフェイベントをやりましょうということになりました。ここで言うカフェは喫茶店という意味ではなくて、いろんなことがごっちゃに集まって、いろんなことがやられている集いの場と受け取ってもらえればと思います。

キーパソンの誕生

この中にキーパーソンとなる「たかちゃん」という愛称の女性がいました。年齢は六十代。熱心な門徒さんで、列座たちを息子のように気にかけています。別院のすぐ近くに住んでいる方です。最初にワークショップをやっている時の彼女の態度は、椅子の背に腕を回して、これに乗っていいこうという気はほとんど見受けられませんでした。「何でこんなことやらんとあかんのかな。まあ列座たちがいるからしょうがないな」みたいな感じでした。ところが、このチームで「映画を上映しよう」、しかも「大音量のシアターを作ろう」

という企画に絞り込んでいくことになったのですが、「大音量を出せるだけのスピーカーがない」となりました。そうしたら、たかちゃんがポツリと「スピーカーなら家にあるよ」と言い出しました。じゃあそれを見せてくださいということになりました。次の日にご自宅に伺うと、家にあつたのは巨大な平面スピーカーでした。根室は知る人ぞ知るジャズのまちなのです。だから、人によってはとんでもないスピーカーやアンプをお持ちでした。たかちゃんの連れ合いは大のジャズ好きで、お金をかけてスピーカーを買われたのです。いつも二人で楽しく聞いていたのですが、ご主人が亡くなって、寂しいのでこのスピーカーを片づけていたそうです。そして、偶然にも自宅に伺った日はご主人の命日と重なっていました。みんなも求めているしと、片付けちゃったのをわざわざ出してきてくれたのです。

そして、これをきっかけに、たかちゃんの気持ちに変化が起きます。今まで背もたれにもたれていたのが、前のめりになって「これはこう」と言ってくれるようになりました。イベントなのでいろんな装飾もしないといけない。横で作業しているのは、最長老の門徒さんで、その横は市議会議員なのですが、この人たちに「ちゃんとやってね」とかなり厳しく指示したり、このチームを引っばっていくリーダー的な存在に変わっていきまし

た。

人生九十年時代の寺カフェへ

そして、八月二九日に「みんなの生き方フェス」と銘打って一日限定のカフェが開かれました。地域の百人の人たちが集まってくれました。カフェでは各グループが考えたイベントが行われました。どんなイベントがあったかというところ、寺シネマ、セラピー手芸、まちの散策もありました。面白かったのは、全員が七十歳以上のチームです。どうしても流しそうめんがやりたいと言われるのです。なぜかを聞いてみると、北海道は竹が大きく育たないのです。だから竹を割っての流しそうめんをやったことがない。でも一回やってみたいとみんなが言っていたのです。そうしたら、九州に知り合いがいるということになって、竹を空輸してくださいました。そして、書道の得意な門徒さんが「流しそうめん おいしいよー」という垂れ幕を作り、高所作業はおじいちゃんが「わしがやる」と言ってやってくださったのです。当日は大盛況でした。地元の子どもたちも流しそうめんを体験したことがなかったのですね。長蛇の列でした。地元の新聞にも『コミュニティづくりに寺

活用』と取り上げてくれました。そこで使われた写真もやはり流しそうめんでした。

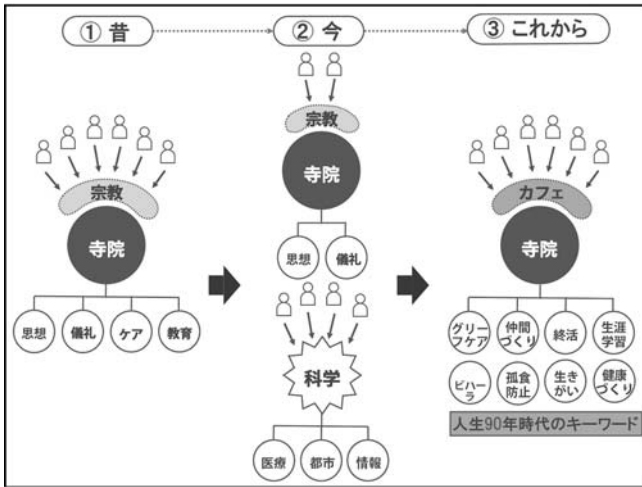
参加者の感想をまとめてみますと、「とても楽しかった。大満足」「こういう機会があると、お寺に入りやすい」「子供からお年寄りまで楽しめる場所だった」「楽しかったので定期的に実施して欲しい」「お寺を教室などでも利用できたらいい」。こんな感想が来ました。「やったかいがあった」みんなそう思ったのですね。

これを聞いて、私たちは次の提案をしました。「門徒でなければお寺には入りにくいという雰囲気がありました。地域との接点を作ればお寺に来る人がいる。生き方カフェを本格的にオープンしませんか」。

考え方はこうです。お寺があっても人はなかなか入りにくい。でも、カフェに切り口を変えた途端、敷居を一気に超える雰囲気できました。これをみんな実感したのです。昔は仏教（宗教）があるからお寺にやってきた。お寺にきたら教えに触れることができました。いろんな儀式もある。心癒されることもある。寺子屋という勉強の場もある。お寺に行けば豊かにいろいろものがあつた。ところが、その豊かさは、お寺からどんどん外に出ていきました。今でも教えと儀礼はきっちり残っていて、もちろんそこに触れたいという人もおられますが、誰もが入っていける場所にはなっていないというのが現在であろうと思いま

す。これからは、カフェという切り口で門戸を開いていこうと。人生九〇年時代のキーワードであるグリーンケア、仲間づくり、終活、健康づくり、ビハラーなど、これから自分たちに必要されるものが豊かにある、こういう場を作っていきませんかという提案をしました。

そして、お寺カフェ、二一世紀型の教化活動のかたちを目指してステップを踏んでいきましよう。まずは「集いの場」を開くこと。その次には、そこに集まった人がいろんなものに触れられる「学びの場」。そして最終的には「ケアの場」です。グリーンケアだったり、ビハラーだったり、人生の最後を豊かに迎えていける、そういうものが豊かにあ



る場所がお寺ということにできないか。けれども、そう簡単に一足飛びにはいきません。みんながやって良かった、面白かったという実感がある中で行っていくというのが大きなポイントです。

「みんなの生き方フェス」に続いては、一日限定の「朝ごはんカフェ」の提案でした。根室別院では毎朝六時半にお朝事のお勤めを行っています。お勤めの後に法話もなされています。地域の門徒さんがお参りに来られるのですが、法話が終わるとみんなすぐにお帰りになっていました。それを、来た流れのままお寺の大広間に行つて、みんなで朝ごはんを食べないかという提案です。合掌しているポスターには、「なんまんだぶも、いただきますもございます。本願寺のカフェですから」との言葉を載せています。合掌で共通しているのも、こんなポスターも作ってみようと。

人が変わっていかなければ、場が変わることはない。でも、人が変われば何もかもが変わっていきます。それをまず、根室というまちでやってみました。六人の列座は、「生き方ラボ」に関わることでアイデアがどんどん豊かになりましたし、自信もつきました。「これをベースにして一つのモデルを作っていきましょう。全国の寺院でやりたいところがあるならば全面的に協力しますよ。ノウハウはあります。実際に楽しいです」、

こういう取り組みに繋げていけないかということになりました。

最初に今回の仕掛け人としてコミュニティデザイナーの山崎亮さんを紹介しましたが、その右腕が西上ありささんという方です。西上さんは朝日新聞の「リレーおびにおん」という欄で根室のプロジェクトを紹介してくださいました。この中で面白いことを言われています。なぜ朝ごはんカフェをみんなで考えたのかというと、「福祉の現場では、自分でご飯を作れなくなると病院や施設に入ることが多いと聞きます。昼食や夕食のサービスはあるけど、朝食は盲点。ニーズはありそうです」と話されています。お昼や晩ごはんの配食サービスはありますが、朝ごはんはないんですよ。その中で、「朝ごはんをみんなと一緒に食べるカフェを作ってみませんか」と。これは福祉行政の落とし穴でもあります。

日の出カフェ本格稼働へ

まずはカフェを本格稼働させていたくために、テーマカラーやロゴ、カフェの名前をどうするかという話になりました。テーマカラーは色のカードから選んでいきます。ポイントになるのは、メイン会場にそれと同じ色があるかどうかです。そこにはない奇抜な色

使つては、どんなに綺麗でも浮いてしまいます。どんなものにも使つていく基本色になり
ますので、寺カフエと言えばこの色という親しみを与えていくものとなります。部屋に何
色があるのかを調べてから色を選んでいきました。そして、ロゴです。これは、とにかく
事例を集めるのです。ネットを活用してとにかく色々な事例を調べました。そして名前。
「冥土カフエがいいんじゃないか」という声も出しましたが、「それだけはやめてください」
と言いました。最終的に「日の出カフエ」という名をみんなで決めました。名前は「日の
出カフエ」、根室は日の出が日本で一番早いまちですので、ロゴには別院の本堂から日が
昇っていく場面が描かれています。そして、ちょっと引いて見ると、日の出の「日」の字
にも見える。テーマカラーは日の出のイメージとも重なり合うオレンジ色。もちろん、メ
イン会場となる大広間にある色です。「studio」からは、テーマカラーやロゴを用いたこだ
わりの名刺、箸入れ、コースター、メニューブックも作つていきませんかという提案もな
されました。

なぜデザインにこだわるのかというと、おしゃれだったり、格好良くないとそこに関わ
っている自分の気持ちが上がってこないからです。デザインがきっちり行き届いているも
の、これが人を動かしていく、人の垣根を越えていく力になるのです。これはデザイナー

の力が大きい。デザイン、重要ですよ。

カフェが具体化していくと、みんなのやる気にスイッチが入っていきました。イベントパンフレットも作られており、一カ月に二回、三回の頻度で実施される年間スケジュールが次々に生まれて、あれもやろう、これもやろうというアイデアが参加するみんなから次々に出るようになりました。

「根室のお寺で日の出カフェはじめました」という呼びかけで、いろんなことが出てきました。懸案であった「朝ごはんカフェ」も実際に行われました。みんなが自由に取っていくバイキング形式です。朝六時半にお勤めがあります。その後、朝ごはんカフェとなります。食事はセルフサービス。そして、みんな



で手を合わせて「いただきます」。これが大好評でした。一人で済ませていた朝ごはんを、みんなで食べる。今までのお朝事では数人来れば多いほうだったのですが、たくさんの方が来てくれました。

そして、たかちゃんが提案したのは「お手紙カフェ」です。彼女が筆で書いた呼びかけの文章を読みます。

あなたの大切な人へ／あなたの大好きな人

ふだん言えなかった／ありがとう／ごめんささい

手紙に託して／届けてみませんか

亡くなった／大切な人に／伝えたい事

手紙を手にした時の／笑顔を思いながら

あなたの想いを／つづって下さい

こういう呼びかけで、「お手紙カフェ」が行われました。亡くなってしまった自分のお連れ合いに伝えられなかったこと。もう悲しくて、悲しくて仕方なかったそうです。その時に、自分の気持ちを整理するうえで手紙を書いてみたそうです。そうしたら、悲しみがなくなっただけではないけれども、少し心が落ち着いて、亡くなったことに向き合って、

それでも生きていこうという気持がわいてきた。自分の心の整理もできてきた。ご自身の経験を通して本当に良かったと思ったので「やってみませんか」ということで呼びかけられています。グリーンケアに関心がある人は、喪失した何かを表現する、それが大きなポイントになるので、このことも覚えておいていただければと思います。

それから、「夜もカフェやるぞ」という話になって、「坊主バー」が開かれました。列座たちが作務衣を着てパーテンになってお酒を振る舞う。いろんな人たちが来てくれました。今まで来たことがなかった若い女性も来られました。彼女たちがSNSでいろいろ発信してくれたので、また噂になって広まっていきます。それから「寺子屋」も始まりました。根室のまちには大学を出た二十代、三十代の人たちが貴重な存在です。多くの人が札幌や東京に出て行ってしまふ。若い列座たちの存在は非常に大きかった。一人部屋で勉強するのと、居間や台所などでお母さんが見守ってくれる中で勉強するのと、成果が上がるのはどちらだと思えますか。一人部屋の静かな環境よりも、誰かが見守ってくれる中で勉強したほうが成果が上がるというデータもあるそうです。それは親ではなくても同じ成果が出る。少し兄貴分の列座たちが、子どもたちの勉強を見守り、わからないところはちょっと教える。そして、お昼はやはり流しそうめんなんです。そういうことが続けられて

います。

そして、活動資金も作らないといけないということで、バザーも行われました。持ち寄りでいろんなものを売ります。中には毛皮のコートや宝石を提供された方もおられたそうです。それから手作りカレーも販売されました。これで一年間の活動資金が確保されていきます。大晦日には子どもたちと作った灯籠を三百丁並べ、除夜の鐘を突いてお勤めがなされました。今年も行うそうです。

お寺に豊かにあるもの

「幸福学」という学問があるのをご存知ですか。慶應大学の前野隆司さんという方ですが、実はAIの研究者で、ロボットを作っていた方です。ロボットを作っていくために、どうしても乗りこえないといけない人間のメカニズムに気づいたのだそうです。それが幸福です。そして、仏教を通して、「人はどういうことに幸福を感じるのか」を捉え直そうとしました。前野さんが定義した「幸せに関する五因子」があります。何かと言えば、「ほっとする」場があることが人間には大切だということです。ほっとすることがないと

幸せを感じられない。その次は前向きと樂觀、単純に言えば「なんとかなる」という思い。その次が自己実現と成長、「やってみよう」という思い。それからこれが大事なんですよ。「ありがとう」と言いうる心、つながりと感謝。そして、独立とマイペース、これは「あなたらしく」生きていけるということ。この五つが豊かにそろっていると、人間は最後の最後まで幸せに生きていけるといふことです。

根室のお寺に一番豊かにあったのは「ありがとう」と、みんなが言い合える関係でした。それが本当に豊かにありました。そして、「なんとかなるさ」という樂觀さ、これもあった。もちろん、「ほっとする」もあった。この三つが豊かにあるのが「お寺」なのだと思います。今ここをもっと活かして、もっと豊かにしていくことはできないかと考えています。

このプロジェクトは、ライフチャートをみんなに書いてもらうことから始まりました。一番多かったのは、ずっと幸福が続いて、最後まで上がっていくグラフでした。この地で最後の最後まで生きたいという、人生の最後（エンディング）を意識しながら、この地域で生きるためになくてはならない「つながり」を再生し、新たな場を生み出す。これが『根室ジーンプロジェクト』の最終命題です。今はステップ1のところですよ。ステップ2

で学びの場をどう開いていくか。そして最後にケアの場につなげていくことができるのか、あるいはこの場そのものがケアの場になっていく。このことが重要だということですね。そのためには、そこに関わる人間が勉強をしないといけないのです。福祉、医療、看護、食。この四つが、どの地域であってもみんなに必要とされるものです。残念ながら、これが今のお寺には決定的に欠けているのです。ここに行くためにどういう歩みをしていくか。お寺が最後の最後までみんなに必要とされる場になれるか、大きなポイントだと思います。

最後に、T-oipms の山崎亮さんが、この当時、口癖のように言われていた言葉を紹介して終わりたいと思います。

楽しさなくして参加なし

参加なくして未来なし

楽しそうだな、ここはいいなあ、実際に「楽しい」ということがないと、誰も参加してくれません。それこそ義務と労働になっていきます。「楽しさ」が、最初のキーワードとして必要です。そして、「参加」することによって初めて「未来」が開かれてくる。これは実感だと思っています。

「楽しさなくして参加なし。参加なくして未来なし」。みなさんはどんなところに楽しさを見出しておられますか。参加して初めて、その面白さがわかるといふこともあります。みなさんはアクティブラーニングとしてもうすでに実践されていると思いますが、学内での学びに留まることなく、まちへ出ていく。人の中に入って、いろんなことを聞きながら一緒に何かが始まっていく。皆さんの学びがそんなことにつながっていくといいなと思っています。

——二〇一八年一二月七日——